紅譚舎文庫

紅き夢みし

村雨　龍

紅譚舎

目次

序章　突然の来訪者　7
第一章　竹林の案内人　19
第二章　春の日の異変　65
第三章　狂気の赤い瞳　91
第四章　蓬莱の玉の枝　133
第五章　暁に照らされ　157
終章　永遠の桜　175
あとがき　182
ゲストページ　187

紅き夢みし

妹が名に　懸けたる桜　花咲かば

常にや恋ひむ　いや年のはに

（万葉集　作者不詳）

序章　突然の来訪者

「竹の成長が早いのは知っていましたが、竹林は本当に景色まで変わってしまうんですね」

感心したように後ろから語りかける声が聞こえた。

「そうだよ。まぁ、頻繁に人が通うような場所でもないし、迷い人が出るのも珍しいことじゃないけれど」

語りかけた声に比べると返事の声は素っ気ない。声の主にとって、それはどこまでも当たり前のことでしか無かったようだ。

少女が二人、竹林の小道を歩いている。道とは言ってもその足元は一面が笹で覆われているし、目の前は若い竹の葉で塞がれていて見通しが利かない。

一見しただけでは本当に足元に道があるのか、そしてどこへ向かって歩いているのかもわからない。一度迷い込んだら抜け出せなくなるように思えてくる鬱蒼とした竹林。

その中を歩く人間のことなどお構いなしに天を目指してどこまでも高く伸びた竹と、その上に輝く太陽。青く生い茂る竹の葉を通して柔らかな日の光が地上に降り注ぐ。

耳には風に揺られた竹の葉がこすれあう音と、足元に生える笹が踏みしだかれる音だけが聞こえてくる。

隙間もなく密集した竹の間から時おり風が吹いては遊びまわる子どものように優しく頬を撫で、長く輝く髪をなびかせる。静かな竹林の春の朝。

踵まで届くほどの長い銀髪に所々リボンを結び、白いブラウスと赤いズボンを身につけて先頭を歩いている少女、藤原妹紅（ふじわらのもこう）は春の明るい日差しに照らされながら、眠気に包まれていた意識が醒めていくのを感じていた。

それは彼女にとって、毎日のように目にしているいつもと同じ朝の光景。妹紅は今日もいつもと変わらずにこの迷いの竹林の道を歩いていた。

だが一人で歩き回っている普段とは違い、この日は一人の少女が後ろから着いてきている。二人はどこへ向かっているのか。事の発端はつい先ほどのこと、日が昇ってから半刻が過ぎた頃の早朝の出来事だった。

その朝、妹紅は自分の家の床の上で体を丸めて眠っていた。彼女は布団も敷かずに肌着だけを身に着けて横になり、時々寝返りを打ちながら静かに寝息を立てている。その姿は傍目から見ればとても快適そうには思えないが、心地よく熟睡しているようだ。

既に部屋の中には朝日が差し込んで、まだあどけなさを残した妹紅の寝顔を照らしていたが、それでも彼女が目を覚ます気配はまるで見られなかった。

「かぐやぁ～……今日は私の勝ちだぁ。やっつけてやったぞぉ……ざまぁみろぉ、むにゃむにゃ……」

一体どんな夢を見ているのだろうか。大の字になりながら無邪気に寝言を洩らす彼女の顔は幸せそうな笑顔に満ちている。その姿はまさに春眠暁を覚えずというところか。

おそらくこのまま放っておけば正午を過ぎるまで寝続けているのではないかと思えるほどに、その眠りは安らぎと快適さに満たされているように思えた。

だが、その安眠はすぐに破られることになる。突然、何者かが忙しなく戸を叩く音が部屋中に響き渡り妹紅は起こされることになったのだ。

「おはようございます！朝早くにすみません、誰かいらっしゃいませんか!?」

ドンドンと、遠慮というものをまるで知らないかのように鳴り響くその音、そして人の声が耳を突き刺す。

否が応にも妹紅は目を覚まさせられる。

無理やり現実へと引き戻された彼女は虚ろな意識の中、丸めた手のひらでごしごしと両目をこすった。

聞きなれないその声の主が誰かはわからないが声の感じは明らかに女性のものだ。

その声から受ける印象は大人とも言えず、さりとて子供のものでもない。
それでもどこか聞き覚えがあるような気がする、幼さを残した少女の声。
妹紅は先ほどまでの心地よい安眠を妨害されたことに若干の腹立たしさを覚え、まぶたを固く閉じて目覚めようとする意識に対してささやかな抵抗を試みる。
「うーん、何なんだまったく……？」
思わずぼやくような声を漏らす。できればこのままいつまでも寝ていたい。耳を塞いで居留守を使おうか、そんな考えが頭に浮かんだのだが目を開けた途端に窓から差し込む日差しを浴びて既に朝だということに気付かされ、眠気は消え失せてしまった。このまま瞼を閉じていたとしても、失われた安眠を取り戻すことはもうできないだろう。
「わかったわかった、今起きるよ」
妹紅は床の上で大きく伸びをしてから半身を起こして一人つぶやく。そしてゆっくりと立ち上がって戸口の方へと顔を向けた。家の中にはまだドンドンと戸を叩く音が鳴り響いている。
寝癖だらけの頭を掻きながら起き上がった妹紅は、重い体を引きずりながらよろよろと戸口へと向かう。

既に朝というには遅い時間だったが、彼女は長年の不摂生が身に染み付いてしまっている所為で早起きがあまり得意ではない。

おまけに昨夜も家に帰ってきたのは夜中遅くで、疲労のために服を脱いでそのまま床に倒れるようにして眠ってしまっていたのだ。

帰ってから眠りに就いたのがいつ頃だったのか記憶は定かではなかったが、眠っていられたのはほんの数時間程度だろうと思われる。

しかし、短いながらも安らかな眠りを妨げられたことに変わりはない。

そんな妹紅の表情は不機嫌さを微塵も隠さず、苛立ちに満ちた心がそのまま現れていた。

だが、そんな妹紅の心情を知る由もなく、彼女が戸口まで移動している間も謎の来客はひっきりなしに戸を叩きながら声を上げ続けている。その様子は明らかに尋常ではない。

意識が覚醒していくのと同時に、ただならぬ雰囲気が妹紅にも感じられてきた。

「朝っぱらからこの騒ぎ様、もしかして急病人かな？」

様子から、相手が自分に助けを求めているのではないかということに気付く。

それもかなり切羽詰った状況に置かれているようだ。妹紅はため息をひとつして少し気を落ち着かせると、やれやれといった様子で扉に手をかける。

火急の用事であれば求めには可能な限り応じようとは思っていた。

とは言えあまりに不躾な来客の態度には説教の一つでもしてやらねばなるまい、そう考えて再び自ら険しい表情を作ってから勢いよく扉を開ける。

だが次の瞬間、目の前に立っている少女の顔を見て思わず驚いてしまった。

「あっ、おはようございま……えっ!?」

目の前の少女も同じく、妹紅の顔を見て意外そうな声を上げる。まるでこんな所で会うとは思っていなかったかのように。

少女は肩のあたりで短く切られた銀色の髪に黒いリボンをあしらい、緑色の洋服を纏っている。その背中には自身の背丈よりも長い日本刀を背負い、腰にはもう一振りの短刀を差している。

驚いた表情で目を見開いてこちらを見つめている少女。その側にふよふよと浮かぶ大きな白い半透明の物体。特徴的な姿から妹紅はすぐに彼女が誰かを思い出した。長い尾を引きながら漂う傍らの物体は彼女の半身、魂の一部である。

妹紅が知る人間や妖怪の中でそんなものを引き連れている者は一人しかいなかったからだ。

「これはまた、こんな時分に珍しいお客さんだね。私の特技が早起きだって、何処かで聞いたのかな？」

眠い瞼をこすりながら妹紅が言う。嫌味のつもりでもないがそんな特技を持っているわけは無く、皮肉交じりの挨拶を交わしてみただけだ。ただし、説教までしてやろうという気持ちはいつの間にか消えていたようであった。

予想していなかった来客の姿を見て少し驚いたとはいえ、過去に所縁のある者が訪ねてきたからか気持ちが少し和らぐ。

「藤原妹紅さん、あなたの家だったとは。それにしても、えぇと……その格好は？もしかして、お取り込み中でしたか？」

目の前の少女は頬を赤く染めながら妹紅の姿をまじまじと見つめている。

その視線に気づいた妹紅は、自分の姿に目を向ける。

するとそこで初めて、身に着けている物が肌着だけだったことに気が付いた。だが妹紅は別段取り乱すこともなく、何でもないという表情で目の前の少女の方に視線を戻す。

「え？あぁ、これか。いや、ただ寝ていただけだよ」

素っ気ない妹紅の返事を聞いた少女だったが、赤く染まった顔はすぐには元に戻らず、隠すように下を向いている。妹紅の姿を見て何か勘違いをしたのかも知れない。

余計な詮索をしてはいけないと思いつつも、まだ疑念が晴れないのだろうか。

「そうなんですか……。あっ、でも、お騒がせしてしまいすみませんでした」

目の前の少女はやや俯きながら申し訳なさそうに謝った。彼女の動きに合わせるように、隣を漂っていた霊体も頭を垂れる。頭といっても、ただその部分が大きく膨らんでいたのでそう見えただけで、本当に頭かどうかはわからないのだが。

少女も霊体も一緒になって謝っているように見えるその様子がなんだか可笑しくて、妹紅は眠気も忘れて笑ってしまいそうになった。だが起き抜けの顔は思うようには動かずに引き攣って、笑っているのか怒っているのかわからない微妙な表情になる。

その顔を見て少女はますます困惑したような様子でもう一度、深々と頭を下げて謝ろうとした。

妹紅の元を訪ねてきた少女の名は魂魄妖夢（こんぱくようむ）。

体の半分が霊体、もう半分が実体でできている半人半霊、半人前の少女。

第一章　竹林の案内人

魂魄妖夢の来訪は、藤原妹紅にとって思いもかけない出来事だった。

そしてまた、妹紅と妖夢の間には一度しか面識が無かったが、その特徴的な姿を見て妹紅はすぐに妖夢のことを思い出すことができたのだ。

かつて夜が明けなくなるという異変がこの幻想郷に起きた後のこと、その異変の首謀者であった月の姫、蓬莱山輝夜（ほうらいさんかぐや）が異変を解決した幻想郷の住人達をそそのかして妹紅に戦いを挑ませたことがあったのだ。正確には夜を止めたのは異変を解決した幻想郷の住人である人間と妖怪達だったのだが、妹紅や他の部外者から見れば細かいことはどうでもよい。とにかく、不思議な永い夜があったということだ。後にその異変は、永夜異変と呼ばれるようになった。

見ず知らずの他人をけしかけてくるなんて、輝夜のしたことを思い出せば妹紅にとってそれは今でも腹の立つ話であった。だが、結局はその事件が妹紅にとってこの世界の他人達と本格的に関わりを取り戻すきっかけに繋がったのだから数奇な運命だと言わざるを得ない。妹紅自身、今はもうその時の輝夜の悪戯に関して恨みには思っていなかった。妖夢もまた輝夜の謀略によって妹紅に戦いを挑んだ者達のうちの一人で、そのことも妹紅はよく憶えていたのだ。

そして今、何の前触れもなく妹紅の家を訪ねてきた彼女が思い詰めたような顔をして戸口に立っている。

眠りを邪魔された早朝の来客には煩わしさもあったが、その表情に只ならぬ雰囲気を感じ取った妹紅は、立ち話も何だからと家の中へと差し招いた。だが妖夢はふるふると首を横に振ると、その場で手短に要件だけを伝えてきたのだ。

「私を永遠亭に連れて行って下さい！事情は後で話しますが、今はとにかく時間が無いのです！」

深々と頭を下げながら懇願する妖夢。

先ほどは妖夢の動きを真似ていた霊体だが、今度は頭を下げる妖夢の周りをせわしなく飛び回っている。その様子はまるで今すぐにでも駆け出したいと、彼女の心理が訴えかけているかのように思えた。

「なるほど、道案内の依頼というわけね」

妹紅が暮らしているこの竹林の奥深くに分け入っていくと、月の民が暮らす屋敷である永遠亭がある。同じ竹林に住む妹紅の元には時折その永遠亭への道案内を頼みに来る人間がいるのだ。

妖夢が永遠亭に何をしに行くのか気になったが、妹紅は時間が無いという妖夢に向かってその場で理由を問いただしはしなかった。

だが今までの経験から言えば、竹林の道案内を頼みに来る里の人間達は急病人を抱えていることがほとんどだった。

地上より遥かに進んだ文明を持つという月の民。その一人、永遠亭に住んでいる八意永琳（やごころえいりん）は自らの研究の傍ら医者をしていた。

月に暮らす本家の月の民の殆どは遅れた文明の中で生きる地上の人間たちを見下していたが、彼女は里の人間たちの病気も別け隔てなく治療している。その腕はどんな病気でもすぐに治してしまうという噂が立つほどで、彼女が永遠亭で医師業を始めるとその評判は瞬く間に幻想郷中に広まった。そして今や、急病人はすぐに永遠亭に連れて行けというのが里の人間たちの間では常識にまでなってしまったのだ。

妖夢もまたその八意永琳に何らかの用事があるらしかった。だが妹紅にとって不可解だったのは、一人で竹林に現れた妖夢自身は健康そうで、とても病気や怪我をしているようには見えなかったことだ。おまけに彼女の暮らす冥界の白玉楼にいる者といえば、凡そ病の心配などする必要のない亡霊や幽霊、妖怪たちだけであった。

一体どんな理由で永遠亭を訪ねるというのか。
もちろん、永琳以外の者に会いに行くということも考えられなくはない。幻想郷にまた何か、新たな異変が起こったとでも言うのだろうか。
ともかくも、妹紅は道案内を引き受けることにした。どんな理由であろうと頼ってきてくれた以上は無碍にはできない性格だ。
「いいよ、わかった。すぐに支度をするからちょっとそこで待っていてくれ」
そう言って、妹紅はもう一度自分の姿に目を落とした。いつもの服と一応の戦闘用に護符を幾つか持っていけばいいか、そう思い一旦戸を閉めて家の中に戻る。
「はい、よろしくお願いします！」
戸が閉じる直前、妖夢の声が聞こえた。妹紅はその声だけを耳に残して振り返ると急いで身支度を整え始める。乱れた髪を手早く結び、白いブラウスを身に纏ってボタンを留めていく。
「えっと、ズボンはどこにやったっけ……？」
キョロキョロと辺りを探すと、部屋の片隅に無造作に丸められた紅い布の塊が投げ出されて落ちていた。

どうやら、昨日の晩帰ってから脱ぎ捨ててそのまま眠ってしまったらしい。我ながらだらしが無いな、と苦笑する。

妹紅はそれを拾い上げて両手で広げる。

特製の護符が貼り付けられた真っ赤なズボンに足を通し、付けっぱなしのままのサスペンダーを肩に引っ掛ける。やはり竹林を歩き回るにはこの格好が一番だなと妹紅は思った。

幻想郷に暮らす同じくらいの年恰好の少女たちは皆、フリルやレースで飾られた衣服を好んで着ていたが、妹紅はそんな潮流には乗らずいつも飾り気の無いズボン姿で通していた。別にスカートを履きたくないというわけではないのだが、住んでいる場所柄動きやすい格好の方が都合が良いということもあり、持っているのは男物のような服ばかりになってしまったのだ。

それでも最近は、里に出て他の少女たちと顔を合わせるようになったこともあり、彼女たちのような年頃の少女らしい格好に対して憧れのような気持ちを抱くことも無いわけではなかったのだが。そういう訳で、永遠亭を目指すことになった妹紅と妖夢はこうして前後に連れ立って竹林の道を歩いている。

里の人間たちはこの場所を迷いの竹林と呼んでいた。
竹は植物の中でも飛び抜けて成長が早く、人が作った道や目印をすぐに覆い隠して周りの景色を一変させてしまう。
その性質を知らずに慣れていない者が竹林に足を踏み込むと、以前と同じ道を歩いているつもりでいてもまるで違う方角に向かって歩いてしまうことがあり危険なのだ。たとえ過去に一度訪れたことがある場所であろうと、その時と同じように目的地にたどり着くのは難しい。
おまけにこの迷いの竹林は、迷い人を狙う人食い妖怪の巣窟でもある。
どうしてここに妖怪たちが棲みつくようになったのかはよくわからないが、妖怪にとっても白昼堂々人を襲うよりも人気のない場所で遭難を装って襲うほうが良いのだろう。以前の妖怪たちは昼も夜も無く、場所も構わずに人間を襲っていたものだが、彼らにも人を襲う後ろめたさが芽生えたということなのか、それとも、単にその方が妖怪らしいという意味での演出の一つとして場所を選ぶようになっただけなのだろうか。
どちらにせよ、過去には多くの失踪者を出していた迷いの竹林だが、今思えばその中には妖怪の餌食になってしまった人間たちも相当数いたのではないかと思う。

ただ近ごろは人間を襲う妖怪が減少傾向にあるらしいという噂も耳にしていた。仏法に帰依して出家した妖怪が集う寺が建ったとかいう話まであるのは、妹紅にしてみれば悪い冗談にしか聞こえなかったのだが。

では、妹紅がそんな危険な場所に住居を構えたのは一体どうしてなのか。

初めは、人目にも付かない場所ということでこの人里離れた山奥の暗い竹林を選んだ。あることが原因で人との関わりに心底嫌気が差した妹紅は、たった一人で静かに暮らせる場所を探していたのだ。

だが、一人きりで生きている間も妹紅の他人を思う気持ちは失われなかったらしい。

次第に妖怪たちが迷い込む人間を襲うのを黙って見過ごす事ができなくなってきたのだ。そして、人間の強さを見せつけてやり、人間に少しでも近づかないようになればと妖怪たちに戦いを挑むことを思いついた。だが、そんな日々を続けているうちにいつしか妹紅は力で相手をねじ伏せることに歪んだ喜びを見出し、遂には妖怪を見れば自分から戦いを仕掛けて叩きのめすことだけが生き甲斐になってしまっていた。

その思い付きの裏には妖術を身に付けた自分の腕試しをしたかったという理由もあった。

その力は強大で同じ人間相手に軽々しく使うことはできず、身に付けたは良いが試す機会が無かったのだ。そんな力を使って憂さ晴らしができる恰好の相手が妖怪だったということなのだが、人に危害を加えるつもりは無いのに云われなく襲われた妖怪もいるのだから迷惑な話である。

しかし妹紅はそんなことには一切構わなかった。むしろ妖怪を襲う行為を正当化するために、いつしかどこかの好戦的な巫女よろしく、妖怪を退治するのが力を得た人間の役目だと思い込むようになっていたくらいだ。

そんな破壊と暴力にまみれた妹紅の日常ではあったが妖怪退治自体は彼らを恐れる里の人間たちから喜ばれたようで、そのうち道に迷った人間がいれば付き添って安全なところまで案内をするようにもなった。

そんな時でも大抵の場合、妹紅は余計なことは話さずにただ目的地まで送り届けるようにしていたため、里の人間たちと言葉を交わすことは少なかった。

だが時折、向こうから竹林の外の話を聞かせてくれることもあったので、ある程度は幻想郷で起きている異変や事件の情報を知ることはできた。長い間、外界との交信が途絶えていた妹紅はいつしかそんな話を聞くことが楽しみの一つになっていた。

そして、相手から話しかけてくれた時には受け答えもきちんとするようになった。

やがて妹紅はこの竹林を通ろうとする人間から頼まれれば道案内兼警護を引き受けるようになった。むしろ、積極的にそれを望むようになっていたと言っても構わないくらいだろう。その頃にはもう並の妖怪たちは妹紅に敵わないことを知っていたので、道中もとても穏やかなものになっていて、警護のためにその腕前を披露することも無くなってしまったのだが。

とは言っても、竹林から妖怪が完全に居なくなったわけではない。

妖怪にも新参者がいるし、今でも里の人間が独り歩きをするのは安全とは言えない環境であることには変わらなかった。

だが、今共に連れ立って歩いている妖夢は常にその身に刀を帯びていることからもわかるように、この幻想郷では名の知れた腕の立つ剣士なのだ。

彼女は純粋な剣の技量だけならば幻想郷の中で右に出るものはいないと言っても良い程の達人である。もっともそれは飛び道具を撃ち散らす弾幕ごっこと呼ばれる決闘が争いごとの解決法であるこの幻想郷で、他に剣の腕を磨く者がほとんど居ないという事情からくるものでもあるのだが。

しかし、万が一、そこいらの野良妖怪が妖夢を襲ったとしても剣術と弾幕を同時に操る彼女には並の力では太刀打ちできないだろう。妖夢自身そのことの危険性は殆ど感じていなかったようで、とにかく早く永遠亭にたどり着きたいという思いから妹紅に案内を依頼してきたようだった。

彼女の家に急病人がいるとしたら、それは賢明な判断だったろう。ただ、妹紅が居ると知って家を訪ねてきた風でもないところが少し気にかかっていたが。

「あなたは……怖くないのですか？」

特に会話を交わすことなく歩いていた二人だったが、突然、数歩先を歩いていた妹紅に向かって後ろから付いてきていた妖夢が尋ねた。妹紅は振り返って、妖夢の方に半分ほど顔を向けながら聞き返す。いきなり聞かれて、何のことを言っているのかわからなかった。

「怖いって、うーん、何のことだろう？」

要領を得ないので仕方なく聞き返してみる。もしかして妖怪たちと戦うことがだろうかと妹紅は思った。だがそういうことなら妹紅は何とも思ってはいない。強さには自信があるし、なにしろ彼女は死ぬことが無いのだ。